

「百聞不如一见」の先にあるもの

佐藤 龍輝 (高校3年)

私が(今年大学受験を控えているにも関わらず)承德市への派遣に参加した理由は単純である。「本当の中国を体験したかった」ということである。

今回の承德市派遣に参加した学生は、定員を大幅に下回る三名だけであった。留学と言えば、(言語的な理由もあるが)ほとんどが米・英・豪・加といった英語圏の国である一方で、ニュースなどの話題としてテレビで見る機会も多く、日本に来る留学生数も多く、経済的にも重要な国である割には、中国や韓国への留学案内や、そもそも留学に行こうと考える人は、英語圏諸国と比べて少ないのが日本の現状である。

中国をはじめ、外国に関する「表面的な」、重要度の低い情報(事故の映像やデモなど:非日常)はマスメディアに氾濫するようになったが、「核心的な」、重要度の高い事実(普段の市民や学生の様子など:日常)は、承德市への派遣に参加し、現地に赴かない限り知り得なかった。しかし、今回の派遣への応募数が示しているように、中国へ向かうこと自体を躊躇する人や関心が薄い人が多いのが現状である。「核心的な」事実を吟味できていないまま「表面的な」情報に踊らされることほど愚かで危険なことはないだろう。

中国のことわざにも、「百聞は一見に如かず」というものがあるが、このことわざには続きがあり、「百見は一考に如かず」、そして「百考は一行(いっこう)に如かず」と続いてゆく。この「一考」や「一行」こそが情報化した現代社会に於いて非常に重要な事であると思う。

承德市での生活は、中国に関する「百見」を、少なくとも「一行」まで高めてくれた。避暑山庄では、中国の様々な地方(江苏、安徽、浙江、内蒙古、西藏など)の特徴的な建築様式を見ることができ、普宁寺や普陀宗乘之庙では、漢式建築と藏式建築の違いやチベット仏教特有の礼拝方法の一部を見ることができ、河北民族师范学院では、満語によって書かれた清代の歴史書を見ることができ、街中では、標準中国語である普通話の発音の基礎となっている承德の発音に囲まれ、承德市民の約四割とも言われる少数民族(満、蒙、回)の暮らしもごく僅かだが垣間見ることが出来た。

中国に限った話ではないが、このように現地に行き、現地の様子を見て、現地の人と話し、現地の人と同じ事をする事によってのみ、互いの持つ小さな疑問や違和感の積み重なりによる距離の隔たりを縮めることが、本当に出来るのではないのだろうか。

最後に、今回の派遣を企画・協力して頂いた柏市、KCC、KIRA、承德市、外事办公室をはじめとする全ての方に感謝します。今後もより多くの学生が承德と柏を訪れることを願っています。

